やま　もと　はる　き
山　本　春　樹

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文第 228 号
学位授与年月日	平成18年3月9日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**バタックの宗教**
論文審査委員	（主査） 教授　鈴木岩弓　教授　嶋　陸奥彦 助教授　木村敏明

論文内容の要旨

本稿はバタック人を対象とし、その宗教生活の実態を明らかにし、さらには、それを通して彼らの民族的アイデンティティの所在を明らかにすることを目的にするものである。

バタック人とはインドネシア共和国のスマトラ島・北スマトラ州の山岳地域に居住するエスニック・グループである。このエスニック・グループはインドネシア群島に早くに（紀元前2500年ごろから）移住した旧マレー人に属する一グループであり、この旧マレー系にはスラウェシ（セレベス）島に住むトラジャ人、カリマンタン（ボルネオ）島に住むイバン人（海ダヤク）人とビダユー人（陸ダヤク）を中心としてダヤク人と総称される多くのエスニック・グループが属している。かれらは後に移住してきた新マレー人に属するエスニック・グループによって海岸地域から追われて山岳地域に住むようになり、周辺に住む新マレー系の人々（バタックの周辺のアチェ人、ミナンカバウ人、ムラユ人、トラジャの周辺のマカッサル人やブギス人、ダヤク人の周辺のムラユ人やブギス人など）とは文化的に異なる傾向をもっている。

北部スマトラの高原地帯とこれを取り巻く急峻な山岳地帯を居住地とするバタック人は、その居住地の地形から、海岸地帯から切り離されて、比較的に孤立した生活を送ってきた。とくに、彼らが持っていたといわれる人肉食の風習（カニバリズム）は誇張された形で外部世界に伝えられ、外の人間が接近することを困難にしていた。これらの結果、バタック人は、マレー系諸民族が持つ文化の古い姿をそのまま保持していると考えられるようになったのである。そして、土着宗教を含むバタックの文化については多くの研究が行われることになった。

本稿はこれらの先行研究を援用してバタック人の伝統的な土着宗教の実態を明らかにするとともに、19世紀半ばに始まり大きな成功を収めたキリスト教の伝道によって、この土着宗教がどのように変貌し

たのかを明らかにする。と同時にこの土着宗教に対するキリスト教側の姿勢がどのようなものだったのかを明らかにする。本稿は「バタックの宗教」と題しているが、ここで「バタックの宗教」と呼ぶものは、伝統的土着宗教だけではなく、キリスト教によって変貌させられた土着宗教と、土着宗教に自らを適合させたキリスト教の両方を含み、これらを併せ持つところに成立している今日のバタック人の宗教生活の総体を「バタックの宗教」と呼ぶものである。

したがってバタックの土着宗教をアニミズムとして規定し、キリスト教の拡大を前にして消え去ったもの、ないしは消え去るべきものとして扱ってきた従来の研究とは違って、本稿は、土着宗教とキリスト教との係わり合いの中にバタック人の宗教生活のあり様を見出そうとするものである。

このような目的に添って、本章では地域、人、歴史と文化、社会の各項目に分けてバタックについての概説を行い、次いで、バタック研究史を振り返った後に、本稿研究のための方法と手順について述べる。その概略を述べれば、まず第一に、バタック人の宗教生活を研究するにあたり、伝統的土着宗教に寄せてこれを理解しようとするものでなく、またキリスト教に寄せてでもなく、土着宗教とキリスト教が綯い混じるところに成立するものを「バタックの宗教」と措定して、その特質を明らかにしようとする。こうすることによって、従来のバタック研究に見られたような、バタック人の宗教生活が持つ土着宗教的な側面とキリスト教的な側面が分離ないし乖離するという欠陥が克服できるし、また、西洋化や近代化や国民国家化に伴う自己認識の分裂の危機を乗り越えようとするバタック人の努力を視野に収めることができると考える。また、このバタックの宗教の特質を解明するにあたっては、従来のバタック研究に見られたような、これを未開宗教として捉え、アニミズム論等によって説明しようとする立場をとらない。また、神的なるものとの関わり方をもって呪術と宗教を区別する宗教の本質論の立場からバタックの宗教を論じるものでもない。

第一章　バタック宗教の静態的研究

本章ではキリスト教の影響を受ける以前のバタックの土着宗教の実態を明らかにし、それをもって全体像を静態的に把握するための構図を提示することを目的とする。

そのためにまずはじめに、これまでのバタック人の宗教生活の歴史を振り返る。外来宗教の影響を強く受ける以前の土着宗教の時代から、イスラムの影響を受け、さらにはキリスト教の影響により土着宗教がその姿を大きく変える時代を経て、土着宗教とキリスト教が綯い混じった今日のバタックの宗教が成立するまでを、「1節　バタック宗教小史」として歴史的に概観する。

次いで「2節　さまざまなバタック宗教像」では、かつての土着宗教がこれまでどのように理解され紹介されてきたのかを、代表的な研究者が描き出すバタック宗教像を見ることによって明らかにする。

「3節　バタックの神話、神々、生霊と死霊・祖霊、および儀礼」では、先行研究の成果を援用し整理しつつ、バタックの神話、神々のパンテオン、生霊と死霊や祖霊がどのようなものであるかを明らかにする。さらには、それらが登場する具体的な儀礼の場を紹介した上で、神々等と儀礼がどのような関係にあるのかを解明することに努める。ここでの結論は次のようなものである。バタック人は神々、祖霊、生霊、自然神等を包み込んだ未分化の一体としての1つのものを儀礼の中で崇拝する。個々の儀礼の中で具体的な神が崇拝される場合でも、その神とその儀礼の間には特定の固定的関係は認められず、その神を通してその背後にある未分化の一体がそこでは崇拝されているのである。この未分化の一体的なるものはデバタと呼ばれることがある。

続いて4節と5節では、3節で明らかにした神々や祖霊といった観念群に支えられて現出するバタッ

クの宗教現象を集団的なものと個人的なものの２つに分けて整理する。集団的な宗教現象とは、血縁的であれ地縁的であれ、なんらかの集団によって担われ、また逆に、その集団が集団として成立するための重要な契機になっているような現象を指す。これに対して個人的な宗教現象とは、個人によって担われ、その影響や結果が個人に帰すような現象を指す。

「４節　集団的儀礼」では、バタックの土着宗教の中でもっとも重要なものの１つであった新年祭を取り上げる。これは、多くの親族集団と広い地縁集団を包含する集団によって行われる儀礼である。その詳細を見ることによって、この新年祭のような集団的儀礼がバタックの社会にとってもつ意義を明らかにする上で必要な材料を提示する。

「５節　個人的儀礼」では、バタック人の宗教生活の中で重要な役割を果たしていた（部分的には現在でも果たしている）ダトゥと呼ばれる宗教的職能者とクライアントの関係の中で営まれるバタック人の宗教生活をさまざまな角度から検討する。その際、バタック文書を研究材料として活用する。バタック文書とは樹皮にバタック語でバタック文字を使って書き記された一種の書物であり、ダトゥが師匠について修行した後に、その学んだところを書き記したものである。ヨーロッパ各地の博物館、図書館等に約1200点、インドネシア国内の博物館におよそ170点ほど保存されており、日本国内では、国立民族学博物館や天理大学附属天理図書館に数点づつ保存されている。これらの文書はバタックの土着宗教の実態を知る上で貴重な資料であるはずだが、しかし、使われているバタック語がダトゥ特有の独特なものであり解読が容易でないこともあって、これまでのバタック研究では十分意活用されてきたとはいいがたい。筆者はヨーロッパ、インドネシア、日本に保存されるバタック文書数点についてそれを解読し、その内容理解に努めてきた。本節ではその結果をもってバタック人の個人的儀礼の実態解明を試みる。

５節ではまず、バタック文書についての説明をした後に、そこに書き記されたダトゥの術がどのようなものであるのか、その概要の把握に努める。次いで、天理図書館所蔵に所蔵される５点のバタック文書を使いその内容を明らかにする。さらには、かつて筆者がカタログを作成したシマルグン博物館（北スマトラ州、プマタン・シアンタール市）所蔵のバタック文書１点を使って、バタック人の宿命論について再検討を行う。

バタック文書の解読は、その言語的、内容的特殊性にかんがみて、決して容易ではなく、まだ不十分な点が多く残されているが、５点のバタック文書について可能な限り詳しい翻訳を行うことによって、ダトゥの術のいくつかについてその詳細な内容の解明を試みる。

宿命論についていうと、従来の研究では、多くの研究者によって、バタック人は宿命論に支配され、これが彼らから生きる活力を奪っていると主張されてきた。生まれながらに人の一生を支配する運命は決められており、これは変えることはできず、これを変えようとするいかなる試みも無駄に終わると、バタック人は信じてきたというのである。果たしてこのような主張は妥当なものであるのかどうかをバタック文書を使って検証したい。使用するバタック文書の中に「もって生まれた運命に関する指示」という項目があり、ここには上で述べたような宿命論に直接関わる事柄が記されている。

結論を述べれば次のようになる。バタック人は確かに宿命論というべき考え方を持っているが、しかし、彼らは決してそれに支配され身を任せて生きているわけではない。もって生まれた運命の重さを知りつつ、同時にそれを避け、あるいはそれを無効にするなど、このもって生まれた運命に抗って生きる術を知っている。この術に関するダトゥの知識を書き記しているのがバタック文書である。これがここでの結論である。

最後に「６節　バタックの土着宗教の構図」では、これまで述べきたったバタックの土着宗教の諸側面を有機的に関連付けつつ一体のものとして理解するには、どのような構図でこれを理解すればよいの

かを考える。

ここでの問題の要点は、1つは、神話や神観念などの観念群の関連性いいかえれば観念群の内的構造をどのようにとらえるのかという点、2つめは、集団的ないし個別的な儀礼から成る現象群とこの観念群の関連性という点、3つめは、この現象群の内的構造はどうなっているのかという点、という3つの点である。

第1の点については、神々とトンディ等の霊的諸存在は、それぞればらばらなものではなく、上位下位の序列的分化と機能的分化の両方を含みつつ、1つのパンテオンへと組織され、これによって神々や精霊たちの世界は構造化されたものとなっている。と同時に、このパンテオンは、そこに属するすべての神々や霊的存在を融解したアマルガムとして立ち現われることもある。すなわちすべての神々等が収斂していくデバタとしてである。

第2の点については、この観念群は限られた特定の宗教現象とだけ結びついたものではなく、一切の儀礼現象に浸潤している。現象のなかに浸透するときこのパンテオンは、その構成要素の一部を前面に打ち出すこともあるが、しかしその場合にも、背景にあるパンテオンの全体が忘れられてしまうわけではない。そしてこの観念群の浸透性と遍在性が、さまざまな現象を全体として1つのものにまとめ上げ、バタックの宗教と呼びうるものにする媒材の役割を果たしている。

第3の点については次のようにいえるであろう。本稿ではこれまでバタックの宗教現象群を、その担い手のありようから見て、便宜的に集団的なものと個人的なものに分けておいた。しかしこの区別は、単に便宜的で表面的なものに留まらず、バタック宗教の全体的構図を描き出すうえでより本質的な意味を持った区別であると考える。すなわち、集団的なものは血縁的、地縁的集団によって担われるものであるが、逆にいえばこれは、その血縁的ないし地縁的集団を集団として成り立たしめ、維持していく役割を担ったものであるといえる。そして、この血縁的ないし地縁的集団が、宗教的儀礼行為を担うことを専らその役目とする集団ではなく、むしろ、バタック社会の構成要素である村落共同体やその連合体、あるいは単系親族集団そのものと重なり合うものであることを考えるとき、この集団的な儀礼現象は、バタック社会そのものの成立を可能にするものであり、この意味で、バタック宗教の中核部分を形成するものであるといえるであろう。これに対して個人的なものは、よりバタックの人々の個人の生活関心の方に結びついたものであるという点で、バタック宗教の周辺部に位置するものであるといってよい。

すなわち、バタック宗教の全体像は、社会の存続を支える集団的儀礼群を中核部分に置き、個人の生存を支える個人的儀礼群を周辺部分に置くという構図で描き出せるのである。そして、この中核部分と周辺部分の両方に浸潤して、両者の一体性を作り上げているのが神々と霊的諸存在のパンテオンである。これが、多くの先行研究の成果を踏まえて復元したバタックの土着宗教の全体像であり、それを静態的にとらえたものである。

第二章　バタック宗教の動態的研究

第一章で明らかにしたバタックの土着宗教の全体像を踏まえて、第二章では、それが、外来の宗教、とりわけキリスト教の影響下でどのように変貌し、またキリスト教とどのような関係を築きつつ、現在のバタックの宗教を作り上げてきたのかを明らかにすることを目的にする。

まず「1節　バタック社会の変動」で、バタックの土着宗教の解体と今日のバタック宗教の形成の背景として、オランダによる植民地支配の浸透がバタックの社会にいかなる変化をもたらしたのかを広く概観する。次いで「2節　土着宗教の解体」では、バタック社会の変動一般を背景に、土着宗教がキリ

スト教と植民地権力によって解体されていくプロセスを見る。その上で、本章の中心となる「3節　土着宗教の再生の試み」で、一度は解体された、ないしは解体されかかったバタックの土着宗教が再生する姿、それを再生させようとする試みのいくつかを明らかにする。

抑圧し解体しようとするキリスト教側からの力に対し、バタックの側がまったく受動的、諦観的であったわけではない。キリスト教側からの力に抗ってバタックの土着宗教を蘇生させ再編成しようとする試みがあったし、また、解体の過程に耐えてその生命を永らえてきたものも、ないではない。バタックの土着宗教の再生の試みは3つの形態をとって現われてきたと考えられる。1つは千年王国運動的形態、2つ目は祖霊崇拝という旧慣の現代的復活という形態、3つ目は思想的営為としての形態である。以下そのそれぞれについて、バタック宗教再生の試みを見ていきたい。

まず千年王国運動についてであるが、ここで千年王国運動というとき、それは、ヨーロッパのキリスト教世界におけるキリスト再臨への待望という事象を指しているのではなく、近現代の世界各地で、植民地の被抑圧民族の間で発生した、現世王国を求める熱狂的な宗教的・社会的運動としての千年王国運動を指している。メラネシアなどでのカーゴ・カルトや北米先住民のゴースト・ダンスなどがその代表的なものであるが、同様の現象がインドネシアでも発生した。ジャワでの正義王再来の運動、北スマトラ、カリマンタン内陸部、中央スラウェシなどで起こった運動などである。このようなインドネシアでの千年王国運動の一環としてバタック地方で起こったのがパルマリム運動とパルフダムダム運動と呼ばれている2つの運動である。

結論だけを述べれば、パルマリム運動とパルフダムダム運動はいずれもバタックの伝統的な価値観や宗教を再生しようとしたものである。しかしその再生は、バタックの伝統的土着宗教をそのままの形で再生させようとしたものではない。外来のものを取り込むことにより伝統の再生を図ったのがこの2つの運動であったといってよい。すなわち、いったんは解体されたバタックの宗教を、その中核部分にキリスト教を取り込むことによって再編成しようとしたのがパルマリム運動であり、一方、イスラム教を取り込むことによってこれを行おうとしたのがパルフダムダム運動だったのである。パルフダムダム運動はすでに姿を消したが、パルマリム運動は細々とではあるが今日まで続いている。

次に祖霊崇拝の復活についてであるが、この研究は、大小の規模や形態がさまざまな記念碑状の建築物、トゥグ、の林立によって特徴付けられる今日のバタック地方の景観の特異さに触発されて行うものである。トゥグとは、死後数世代を経た祖先の遺骨を掘り出して改葬するための納骨施設のことである。このような改葬の風習は、バタックの土着宗教の重要な部分を占めるものであり、バタック人の社会組織上きわめて重要な親族組織を維持する上でも重要な機能を持つものであった。まさにそれゆえに、この改葬儀礼と、そこに集約的に表現されるバタック人の祖霊崇拝はキリスト教会からの抑圧の対象となったものである。この抑圧によって祖霊崇拝は一度は衰退するが、しかし、1950年代に入るとふたたび復活し、以後衰えることなく逆にトゥグの建立は隆盛を極めるようになる。まさに祖霊崇拝は復活し、バタックの土着宗教の再生の重要な要素となっているといってよい。

このような改葬儀礼の実態を明らかにすることに努めるが、しかし、ここでの主たるテーマは、そのキリスト教との関係の解明である。改葬儀礼や祖霊崇拝に対する教会の側の態度を歴史的に把握し、現在のプロテスタント・バタック・キリスト教団の「教会罰則規定」の参照を含めて、両者の関係の解明に努める。

このテーマに関する結論を述べると、次のようになる。

トゥグに具現化される今日のバタック人の祖霊崇拝は、キリスト教化以前のバタックの土着宗教の継承ないしは復活という側面を色濃く持ちつつ、同時に、キリスト教との調和をも模索する。そこには、

外来宗教と伝統とが今なお鎬を削っており、両者の確執がバタックにおいては今もなお続いていること、およびこの２つの間で和解の道が模索されている状況が示されているのである。すなわち、現在のバタック人の間では、キリスト教と土着宗教に由来する祖霊崇拝が共存しており、トゥグがこの両者の関係を象徴的、集約的に表すものとなっている。この関係は、一面では、キリスト教側が祖霊崇拝を抑圧し、これに対して祖霊崇拝側が抵抗して生き延びてきたという形を取っている。しかし他面においては、祖霊崇拝側がキリスト教に歩み寄り、あるいはキリスト教から新たな養分を吸収して、その活力を取り戻そうとする面も持っているのである。

こうして祖霊崇拝というバタックの土着宗教は、キリスト教から新たな養分を吸収することによって、自らを変容させつつ再生しようとしているといってよいであろう。バタック人の間に見られた千年王国運動が、パルマリム運動のようにエホバやイエス、あるいはそれによって使命を与えられた預言者といったキリスト教的諸観念を援用してバタック伝来の価値観を新しい形で再生させようとしたのに似て、バタックの祖霊崇拝もまた、キリスト教との接点を探りつつ伝来の信仰を新しい形で再生させようとする試みであるといってよいであろう。

付言すれば、祖霊崇拝そのものはともかくとして、それを改葬という形で表現する習俗は、キリスト教を受容し、キリスト教が大きな影響をもつ地域では、世界の他の地域では見られないのではないだろうか。もしそうだとすれば、このバタックの祖霊崇拝の現象はきわめて興味深い事例を提供してくれるものであるが、世界の他の地域との比較考証は本稿の範囲を超えるものであるため、ここでは新たな研究課題の可能性を指摘するにとどめておきたい。

最後に土着宗教の再解釈というテーマについてであるが、ここで論じようとするのは、バタック人自身の手になるバタック宗教の研究がどのような性格のものであり、どのような意義を持つものであるのか、ということである。取り上げるのはトビンとシナガという研究者のものであるが、トビンもシナガも、プロテスタントとカトリックの違いこそあれ、どちらも敬虔な信者として、キリスト教の信仰を大切にする。と同時に、彼らにとっては自らがバタック人であるということも厳然たる事実であった。

バタック人であるということ、つまりはバタック人のアイデンティティを形成してきたのは土着宗教を中心とするバタックの伝統である。そのため、キリスト教徒となったバタック人にとって、その生き方の中で土着宗教とキリスト教が対峙するという状況は避けることができないものとなった。トビンとシナガが直面した問題はここにあった。この問題に取り組んだのが、バタック宗教に関する彼らの研究であったといってよい。この問題に取り組むにあたり、伝統を背景としたバタックのアイデンティティとキリスト教徒しての信仰の両方を保持することは、最初から彼らに求められた要請であった。しかし、この要請に応じるためには、バタックのアイデンティティの背景となる伝統、とりわけその中心である土着宗教が、従来のヨーロッパ人研究者がいうようなアニミズムとか未開宗教であってはならない。もしもバタックの土着宗教が未開のアニミズムであるとするなら、それとキリスト教とをつなぐ掛け橋を見出すことははじめからできないからである。キリスト教との間に接点を持つようなものとしてバタックの土着宗教を理解しなおすことが必要であった。この試みがトビンとシナガのバタック宗教論であったといってよいであろう。

そのバタック宗教論の中でかれらが、高神ムラジャディ・ナ・ボロンを唯一なる人格神であるかのように扱い、超越性と内在性という優れてキリスト教神学的な概念でその属性を論じたのは、バタックの土着宗教とキリスト教の親和性を示すためであるといってよいであろう。トビンとシナガの研究は、バタック人としての伝統的文化的アイデンティティとキリスト教徒としての宗教的アイデンティティの調和を実現するために行われた、土着宗教の再解釈だったのである。

終章―まとめ

ここでは、第一章と第二章で述べきたったところを改めて整理して提示した上で、次のようなまとめを行った。

第一章で明らかにしたような全体像を持つバタックの土着宗教はキリスト教を前にして変貌し衰退する。しかし、第二章で論じたように次のような形でそれは蘇る。パルマリム運動によってバタックの道徳律や神崇拝は蘇り、パルフダムダム運動を通してバタックの不死身の術は蘇り、トゥグ建立を通してバタックの祖霊崇拝は蘇った。さらには、バタック人研究者の研究を通して、土着宗教そのものが再生したわけではないにせよ、その神観念の再解釈を通してバタックのアイデンティティの再生が図られたのである。とはいえ、これらの試みを通して再生し、あるいは再生が図られたバタックの宗教は、外部からの影響にさらされる以前のバタックの土着宗教そのままのものではない。それらはいずれも外来の新しい要素、とりわけキリスト教を取り入れてわがものとし、それを基軸にして再編成し、再解釈することを通して再生されたものである。それは動物が変態するように、いわばメタモルフォウズした土着宗教であるといってよいであろう。

こうしてバタックの土着宗教はキリスト教の影響下で変態した。一方でキリスト教の側でも、第二章で見たように、その伝道の過程であるいは教会組織を形成する中でバタックのアダットを受け入れた。この意味ではバタックの伝統の影響下でキリスト教が変態したということもできる。大きくメタモルフォウズした土着宗教と少しばかりメタモルフォウズしたキリスト教をあわせもつものが今日のバタックの宗教であり、そこで今日のバタック人の宗教生活が営まれているということができるであろう。このようなバタックの宗教の変態の過程はまだ完了したものではない。変態の末にバタックの宗教がどのような内容と形式をもったものになるのかは、まだ明らかではない。新しいバタック宗教の形成は始まったばかりである。

論文審査結果の要旨

本論文は、インドネシアのスマトラ島に暮らすバタック人の宗教生活の諸相を、包括的な枠組みにおいて記述するとともに、それらを、外来文化の影響や近代化、国民国家化による自己認識の分裂の危機を乗り越えようとする試みとして位置づけ理解しようとする試みである。

まず序章では、本論文の主題として、従来の研究で個別に取り上げられる傾向にあったバタック宗教の諸相を総体として捉え、その特質を明らかにするということがあげられる。つまり、従来の研究にあって個別にとりあげられがちであった「土着宗教」と「キリスト教」の両方を含み、それらが綯い混じって作り出されるバタック人の宗教生活の総体を「バタックの宗教」とみなして考察の対象とし、その①静態的構造と②歴史的動態の両面的考察を通し、バタック的なるものの所在を明らかにしていくということが述べられる。また、このようにすることによって、キリスト教の受容、近代化や国民国家化に伴う自己認識の分裂の危機を乗り越えようとするバタック人の努力を視野に納めることができるということが指摘される。

「第一章、バタック宗教の静態的研究」は、上の①の考察にあてられている。「1節　バタック宗教小史」では、バタック地方の宗教の歴史が、「孤立の時代」から「イスラム化とキリスト教化」、そして「キリスト教と土着宗教のかかわり」という枠組みにおいて整理され、バタックの宗教が持つ緊張をはらんだダイナミックな性格が明らかにされる。それをふまえて2節以下では、さまざまな資料を駆使し

つつ、19世紀におけるキリスト教伝来以前に成立していたバタックの「土着宗教」の全体像が明らかにされていく。まず「2節　さまざまなバタック宗教像」では、バタックの「土着宗教」に関する資料としてヴァルネック、ヴィンクラーという2人の宣教師、そしてトビン、シナガという2人のバタック人研究者の著作をとりあげ、それぞれの資料のもつ特徴と限界を批判的に吟味している。とりわけ、宗教学や人類学における数々の古典的著作に引用されてきたヴァルネックの著作について、当時隆盛であった原始一神教説やアニミズム説との関連を考慮すべきであるとの重要な指摘をおこなっている。「3節　バタックの神話、神々、生霊と死霊・祖霊、および儀礼」では、バタックの神々と諸霊の観念が検討の中心とされる。それらの多様な神々と霊は、従来されてきたように、創造神ムラジャディ・ナ・ボロンを頂点としたパンテオンとして描き出すことがひとまずは可能である。しかし本論文では、それにとどまることなく、ヴィンクラーによってなされた呪術師がおこなう諸儀礼の記述をもとに、具体的にいかなる儀礼において、いかなる神々や霊へと呼びかけがなされていたかを整理し、生きた崇拝の場面におけるそれらの関係の考察を試みている。その結果、おおまかに言って、儀礼の場面においてバタック人は神々と祖霊と自然神とを一組にして崇拝するとはいえるが、儀礼内容と崇拝対象が必然性をもって結びついているとは言いがたいということが指摘される。そしてバタック人が諺や日常会話においてこれらの神々をひとまとめに「デバタ」と呼んでいる点に注目しつつ、むしろこのような未分化の一体としての「1つのもの」の崇拝が先にあり、それが具体的な儀礼の場において様々な名前で呼ばれるのだという見方を提示している。バタックの宗教における崇拝対象を以上のように整理した後、以下の4節と5節では、バタックの儀礼生活がとりあげられる。まず「4節　集団的儀礼」では、主にその事例として、ビウスと呼ばれる一村を超えた血縁的地縁的集団によりかつて行なわれていた諸儀礼のうち、最も重要な「マガセ・タオン」(一年の始まりの儀礼) の実態が、様々な資料を渉猟しつつ明らかにされる。一方、「5節　個人的儀礼」においては、キリスト教受容以前のバタック社会において重要な役割を果たしていたダトゥと呼ばれる呪術師の活動の実態に迫ることが試みられる。バタックの呪術師に関する研究は、資料の欠乏ゆえに充分に行なわれてきたとは言いがたく、数少ない宣教師の報告書をもとにしたステレオタイプ的な呪術師像が繰り返し描き出されるにとどまってきた。しかし、論者はバタック文字による呪術の書 (pustaha-laklak) を用いることでそのような停滞を突破しようと試み、特に、呪術師の術のバラエティを具体的に明らかにしたこと、そしてそれらに通底する世界観、とりわけ人間の運命をめぐる観念世界を明るみに出したことは、バタック研究における重要な貢献である。この部分は、世界的に見ても数少ないバタック文書の専門家としての論者の特色がいかんなく発揮された、本論文のうちでも最もオリジナリティの高い部分であるといえる。以上の考察をさらにすすめて「6節　バタックの土着宗教の構図」では、バタック宗教の全体的構図を描き出す試みがなされている。すなわち、バタック社会そのものの成立を可能にする集団的儀礼を中核とし、個々人の生活関心に結びついた個人的儀礼がその周辺に位置する。そしてこの中核部分と周辺部分の双方に浸潤して両者の一体性を作り上げているのが神々や霊的諸存在のパンテオンである、というものである。

「第二章　バタック宗教の動態的研究」では、第一章の考察を踏まえて、更に、バタックの土着宗教が外来の政治的、文化的、宗教的影響のもとでどのように変化してきたのかを取り扱っている。「1節　バタック社会の変動」においては、バタック社会の孤立性が破られていく経緯を、パドリ戦争、ドイツの伝道団によるキリスト教伝道、オランダの植民地体制への組み入れと抵抗勢力の排除 (シシガマガラジャ戦争) などにふれながら略述している。「2節　土着宗教の解体」では、その社会変動がバタックの宗教に及ぼした影響を、とりわけキリスト教と土着宗教のかかわりに焦点をしぼりながら考察している。1861年にバタック地方で活動をはじめたライン伝道協会は、信者の儀礼活動にさまざまな規制を加

えはじめる。儀礼的な踊りへの参加禁止や打楽器（ゴンダン）の演奏の禁止などが植民地政庁への働きかけによって矢継ぎ早になされたが、中でも特に、上述のビウスによる儀礼が禁止されたことはバタックの土着宗教の中核部を麻痺させ、大きなダメージをそこに与える結果となった。「3節　土着宗教の再生の試み」では、そのようなキリスト教による抑圧と解体の力に抗ってバタックの土着宗教の①再生を図ろうとする運動、および②それを維持していこうとする試みがとりあげられる。①の事例としてとりあげられるのが、バタックにおける「千年王国運動」としてのパルマリム運動とパルフダムダム運動である。パルマリム運動は、1890年に、上述のシシガマガラジャ戦争におけるオランダの優位が決定的になる中で、シシガマガラジャ十二世の顧問であったソマラインという呪術師によってはじめられたものである。一方、パルフダムダム運動はさらにオランダによる支配が確立し、バタック社会や若者の考えに影響を及ぼし始めた1910年代にジャマン・ポハンとパガンベジャウ・パサリブの二人によっておこされた。いずれの運動も、植民地支配や外来の宗教による圧力下で、土着的な宗教や道徳を復活させようとする試みであるが、しかし注目すべきはそれらが外来の要素を触媒にし一部はそれらを取り入れつつ土着宗教の復活を図るという点であるとされる。つまり前者にあっては、ソマラインに伝統的道徳の復活を啓示したのは「エホバの神」であるとされ、また後者では伝統的な不死身の術がイスラムから借用された儀礼を通して実現されるのである。②の事例としては改葬儀礼および改葬墓（トゥグ）の建設が取り上げられる。これらの慣習は、バタック人の伝統的な霊魂観にねざし、彼らの祖先崇拝と切り離すことができないものであると論者は述べる。すなわち、バタック人の間では、人は死ぬとベグという死霊になると信じられている。ベグは死者の国で生者と同様の暮らしを送っているが、その境遇は子孫たちのこの世でのありように依存していると考えられている。子孫たちがその数を増し、富み栄え、かつ祖先であるベグのことを忘れなければ、ベグは死者の国での地位を高め、ベグの長であるスマゴットになることができる。そしてまさに、自分たちの祖先がスマゴットになったことの証を立て、その大いなる力を称え、自分たちとその祖先との結びつきを確認するために行なわれるのがこの改葬儀礼であるとされる。この儀礼は、キリスト教会によって常に異教的であるとの疑いの目で見られ、実際に規制も加えられてきた。本論文では一方でこれらのキリスト教によって加えられてきた規制を文献研究によって詳細に明らかにするとともに、フィールドにおける聞き取り調査をもとにして、現在、キリスト教的な色付けをされつつも維持されている改葬儀礼の実態を報告している。最後にこの節では、バタック人宗教学者の研究を、土着宗教の再生という文脈の中で読み直すという非常にユニークな試みがなされる。具体的にそこで検討されているのは、上でとりあげたトビンとシナガがそれぞれ1950年代と1980年代に出版した著作である。論者によれば、いずれの著作も、バタックの宗教が従来「アニミズム」という枠組みにおいて理解されてきたのに抗し、高神信仰を中心にすえてそれらを捉えなおそうとする内容になっているという。つまりそこには、代表的な「未開宗教」論であるところの「アニミズム」を拒否し、バタックの土着宗教とキリスト教との類似性を主張しようとする筆者の意図をうかがうことができるというのである。しかしその一方で、とりわけトビンは、バタックにおける神観念の独自性を主張し、その高神が宇宙の創造神ではなく、宇宙そのものであり、世界の中に存在する一切のものにその刻印を押すのだと主張していると論じている。本論文では、これらの学説の妥当性が批判的に検討された後、むしろそれらは、バタック人でありつつキリスト教徒でもあるという彼らの分裂したアイデンティティを克服しようとする試みとして読まれるべきではないかと主張され、そのような意味ではこれらもバタック人における土着宗教再解釈の試みの一貫と位置づけうると主張される。

終章では、これまでの義論をふりかえりながら、今一度バタックの宗教の全体像を描き出すことが試みられる。つまり、バタック人たちの信じる神々や諸霊は一方で個別の名前と属性をもち、互いに関係

付けられてパンテオンを形成している。しかし具体的な儀礼の実践の場面に立脚して検討するなら、それらの特定の神や霊ではなく、それらが融解した「アマルガム」としてのパンテオン全体が崇拝の対象となっているというべきである。そして論者によれば、その融合した全体を表す言葉こそが「デバタ」に他ならない。そしてその「デバタ」が、社会の存続に不可欠な中核的集団的儀礼と、個人の関心に基づいた周辺的個人的儀礼の双方を基礎付け、結び合わせているのであるという。また、このように描き出されたバタックの「土着宗教」は、外来文化の影響、とりわけキリスト教の伝来と受容によって大きな変化をこうむっているとされる。「土着宗教」はキリスト教により制限を受け、「解体」されていった。しかしその一方で、バタックとしてのアイデンティティが模索される中、外来の要素を取り込んだ形でそれらを「再生」しようとする動きも見出すことができるとされ、千年王国運動や改葬儀礼、バタック宗教学者による「土着宗教」の再解釈の試みなどがとりあげられた。

本論文は従来、断片的にとりあげられる傾向のあったバタックの宗教生活について、先行研究の渉猟や文字資料、フィールドワークに基づきながら、その全体像を明らかにすることに成功している。「中核」「周辺」「解体」[再生] といった明快な鍵概念を用いて多様な宗教生活の諸相およびその変動を明快に切り分けていく論者の手法は鮮やかなものであり、ある社会の宗教を総体として記述する「宗教誌」とでもいうべき新しい分野の範例となることさえ予感させるものである。また、世界的に見ても数少ないバタック呪術の書の専門家としての論者の特色が生かされ、本論文には日本で最初のその翻訳や解説が含まれており、この面においても非常にオリジナリティの高いものといえる。これらの点において本論文はバタック研究のみならず宗教学全般、とりわけ近年盛んになりつつある「呪術」研究の分野の進展に大きな寄与をなすものであるといえる。

したがって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認められる。